



No. 18

2009.6

(目次)

- 巻頭言
学部創立60周年を迎えて —未来の教育が生まれる場所—
..... 研究科長 学部長 矢野智司 2
- 研究ノート
教員から 臨床心理実践学講座 准教授 高橋靖恵 3
- 社会人院生から 教育科学専攻 専修コース1回生 廣原直樹 3
- 学部生から 現代教育基礎学系4回生 中丸 創 4
..... 教育心理学系4回生 井田美沙子 4
..... 相関教育システム論系4回生 西川 光 4
- グローバルCOEの21年度の活動
..... 教育認知心理学講座 教授 拠点リーダー 子安増生 5
- 大学院教育改革支援プログラムから
..... 心理臨床学講座 教授 桑原知子 5
- 教育実践コラボレーション・センターから
..... コラボレーション・センター関連 助教 吉田正純 6
- 臨床教育実践研究センターから
..... 臨床心理実践学講座 助教 井上嘉孝 6
- 事務室から 事務長 吉井 晃 7
- 図書室から 専門職員(図書掛長) 沼澤 博 7
- 留学生から 比較教育政策学講座 博士後期課程1年 黄 儒芬 8
- 諸記録 8~10
①入試結果 ②学位授与件数 ③教育教員免許状取得状況 ④人事異動 ⑤寄付金受入 ⑥受託研究受入
⑦科学研究費補助金 ⑧ハラスメント防止に関する研修会
- 諸報
新任教員、事務員紹介 11~12

巻頭言

学部創立60周年を迎えて

—未来の教育が生まれる場所—

教育学研究科長 学部長 矢野 智 司



教育学部が今年、創立60周年を迎えることになりました。1949年に京都大学教育学部は誕生しました。以来、60年間、これまで4000名にもものぼる卒業生を社会に送り出すことができました。卒業生の活躍は教育関係機関はもとより多岐にわたってはいますが、それぞれ人間の生涯にわたる形成・生成・発達・成長にかかわっており、教員養成機関でない教育学部として、社会の期待に十分に答えてきました。また本学部は教育のみならず、この間、一貫して卓越した研究成果を実現し、内外の教育諸科学・心理学研究をリードしてきました。

教育学部が誕生してからこの60年間さまざまな変化がありましたが、とりわけこの10年間の変化はとてもの大きいものでした。たしかに教育研究の中心が学部から大学院へと移行した1998年の「大学院化」も大きなことでしたが、最も大きな出来事は、明治以来の130年間、国の機関として位置づけられてきた国立大学が2004年に「国立大学法人」に変わったことです。これは日本の大学の歴史において「新制国立大学」の発足に匹敵するほど大きな改革でした。そして同年、京都大学も国立大学法人に変わりました。法人化以降、国立大学法人はそれぞれの責任で「中期目標・中期計画」を策定し、自分たちのアイディアで未来の図を描くことができるようになりましたが、「法人評価」と「認証評価」という外部の評価機関の評価を受けなければならないようになりました。さらに予算のあり方や大学の意志決定のルールも大きく変わりました。このような京都大学の変化は、そのまま教育学部のさまざまな領域にわたって改革を促すものとなりました。

世界が高速度でグローバルに変化していく時代においては、教育の状況も学問の状況も大きく変化し、私たちもこの変化に対応することを強いられていますが、世界の変化に受動的に対応しているではありません。これまでがそうであったように、教育学部は、教育・心・人間の真摯な研究を通して、この世界の変化によっておこる人間と教育の問題の理由と原因とを明らかにし、それをクリティカルに評価し、知的想像力でもってよりよい姿を描きだし、その姿を実現するためのプランを積極的に提示する使命があります。またそのような学問を構築し世界を改善していく人材を養成する使命があります。このように教育学部は、これからも「未来の教育」が生まれる場所でありたいと考えています。

そのため、教育学部では積極的に競争資金に応募し、現在、①GCOE(教育学研究科拠点:平成19-23年度)「心が活きる教育のための国際的拠点」、②概算プログラム(平成19-23年度)「子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業」、③大学院GP(平成19-21年度)「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成(京大型臨床の知創出プログラム)」の3つのプロジェクトがすでに進行しています(これらの詳細は教育学部のホームページで見ることができます)。

60歳は人間でいえば「還暦」ですが、新たな創造的な60年のサイクルを創り出すべく、教職員一同初心に戻って努力したいと考えております。これまでと同様、これからも皆様のご支援をいただけることを心より願っております。

2009年5月

研 究 ノ ー ト

教 員 か ら

臨床心理実践学講座 准教授 高橋 靖 恵



今から28年ほど前になります。私が思春期・青年期の問題と家族について1950年代から70年代の文献を調べていたところ、いろいろと理論的背景は異なるのですが、「分裂病*を作る母親(*現在は統合失調症)」、「登校拒否児*の親の特徴(*現在では、一般に不登校と呼ばれる)」といった研究が目にとまりました。私自身は、まだ学部3年生の実習に取り組んでいる頃で、臨床心理学について学び始めたばかり、まだまだ知識も浅い状態です。それでも、素朴に「いくら心の中のこととはいえ、自分の子どもの心を病むようにする親なんているのだろうか」と思ったのです。きっと、何か「大きなボタンの掛け違いのようなことが重なっているに違いない」と感じました。そして同時に、「分裂病者の家族コミュニケーション」という研究も目にとまりました。ボタンのかけ違いはコミュニケーションのズレかもしれないとも思いました。もちろんこれらの研究は、それだけで「病気」になるというわけではなく、心理学的な援助をしていく上での家族関係の理解という視点ですが。

その後精神科の病院での実習をさせてもらうことになり、実際にクライアントさんとかかわることがはじまりました。するとこれまで文献で理解していたものからは、はかりしれないぐらいに、家族の存在と心の問題には大変深いものがあり、これは簡単なことではないと、ますます関心が向かいました。

そして心の問題とその家族については、盛んに研究と実践が積み重ねられ、我が国でも、家族心理学や家族療法に関する学

会が設立し、臨床心理学の一つの分野として、家族の問題が大きくなり上げられるようになってきました。家族全体をシステムととらえ、誰か一人の問題とするのではない考え方や、夫婦や親子といった、組み合わせで考える際にも、そのコミュニケーションを検討するような流れになっていきました。私自身が素朴に疑問を持ったことも、その後実際の臨床実践活動をさせていただく中で、よりいっそう重要性をまし、クライアントさんの心の中にある家族との問題や、実際の家族関係、コミュニケーションについても、サポートをしていくようになりました。

最近では、クライアントさんの世代と、その親世代、そのまた親(祖父母)世代それぞれの葛藤や発達課題などが、複雑に絡み合い、クライアントさんの問題に反映していると理解し、家族全体のライフサイクルの中で、心の問題を考えていくべきと思うに至りました。まだ私は、臨床心理学とその実践の奥深さについて、ようやく少しわかりかけてきたところですが、さらにその理解を深めるべく努力を重ねていきたいと思っています。「出会いは新鮮に、かわりは深からんことを」私の恩師故村上英治先生の言葉です。クライアントさんとかかわる時に常に大切にしていきたいと思っています。

社 会 人 院 生 か ら

教育科学専攻 専修コース 1回生 廣原 直 樹



私は大学卒業後、平成18年に東京都の行政職員となり、教育庁配属の下で特別支援学校、都立高校といった教育現場の経営企画室内で学校経営に携わってきました。その中で、多様化・複雑化する生徒の問題、保護者や地域からのニーズへの対応など、今日的な課題を目の前にし、限られた予算や人的資源をいかに有効活用していくべきか、という問題意識を強く感じるようになりました。

現在、日本の教育行政は大きな曲がり角にさしかかっているように思います。まず、マクロ的な潮流として、団塊の世代の大量退職に伴う、教員大量採用時代の到来を挙げることができます。そこでは、これまでベテラン教員が培ってきた指導力や暗黙知をいかにして若手教員に引き継いでいくかという課題や、学校全体の教育力の維持の問題が生じてきます。次にミクロ的視点から眺めると、若手教員の大量採用に際しては、個々の教員の「質」をいかに担保していくかという問題もあります。とりわけ、社会状況の変化に伴う、家庭や地域社会からの要望の多様化を受け、教員一人ひとりに求められる資質能力や専門性への需要はますます増えていくことが予想されます。

こうした状況に対して、行政側がすべきことは、現場教員の意欲や能力を最大限に引き出せるような教育制度設計を行っていくことだと考えています。というのも、教員一人ひとりの能力が十分発揮されることによって、はじめて学校全体が活性化され、その組織力が発揮できるからです。ただ、その場合にも、最近の公務員制度改革の流れのなか国・地方等で盛んに議論がなされている、年功序列に依らない人事制度、能力級に基づいた給与体系といったシステムを、安易に教育現場に導入するのではなく、それらがどの程度まで教育活動のインセンティブとなりうるのかを慎重に検討していく必要があります。

大学院では、「教育資源の配分」に焦点をあて、教育制度設計上で予算や人的資源をどのように振り分ければ、インセンティブが有効に機能するかという点を研究していきたいと思っています。そして、得られた研究成果は都の教育行政に還元していきたいと考えています。



学部生から



現代教育基礎学系
4回生

中丸 創

大学生活4年目が始まりました。これまでの教育学部生としての3年間は短かったのか長かったのか、さらにこの3年間で私は成長できたのか、或いは衰えていったのか… こういったことはよく分かりません。ただ学問に関して言えば、この学部の見方が数年前とは変わったというのは事実です。

かつて感じていたのはこの学部が飛び抜けて小さいというこ

とです。学部の定員は一学年60人で、こじんまりとした建物、学系の数など、他学部と比べて何もかもが小さい、それが教育学部なのだとか大まかに解釈していました。

しかしそのイメージは私の中で今や正反対となっています。別に定員が増えたわけでも建物が突然巨大化したわけでもありません。私がいま感じているのはこの小さい学部の中にある学問・研究領域の広さ、そしてその密度の濃さです。かつては3つしか無いと思っていた学系も、そんなにあるのか、と今では思っています。

この学部の広さに気付いただけで過去3年間の意味はあるかなと少し思い、その直後にそれを活用できていない自分に気付きます。あと1年でどれだけの広さまで自分の中に掬い取れるだろうかと、そんなことを考えながら過ごしています。



教育心理学系
4回生

井田 美沙子

「教育を総合的に見る」という視点に惹かれ、本学教育学部に入学した私。あれから早3年、学部生としての生活も残すところあと一年を切った。

本学部には3つの系があり、教育を巡る様々な視点に触れる機会がある。心理学、方法学、社会学など、どのアプローチもとても興味深いものだった。

現在私は、教育心理学系に在籍しながら、違う系の教授にご指

導頂き、発達心理学の分野で卒業論文を書く予定だ。また、文学部の研究会にも参加させて頂いている。その中で、「次はまさにここを知りたい」という、研究の最前線を垣間見ることができ、非常に刺激的な毎日である。卒業論文を書くことはしんどい作業だが、最も楽しい時期でもあるのではないだろうか。

また、教育心理学系の同回生で開く、勉強会も支えになっている。専攻する分野は各々違う。異なる視点から、自分の分野で前提条件となっていることに疑問を投げかけられるという経験は、自分自身の糧になっていると日々感じている。

スタートラインにもまだ立っていない私だが、研究はこのようにいろいろな人との繋がりの上に成り立っているものなのだと感じる。様々な人材や環境に恵まれた本学部は、その繋がりを知るのに最適な場所であると私は思う。



相関教育システム論系
4回生

西川 光

京都大学に入学してから気づけば4度目の春を迎えました。現在は比較教育学を専攻する傍ら、英語の教員免許取得のための勉強にも励んでいます。

教育学部に入ってよかったと思うことはたくさんあるのですが、その中で最もよかったのは、人と人とのつながりが強いところです。わいわい騒ぐこともあれば時に真剣な話も出来る同期との

横のつながり。学部祭やゼミを通して仲良くなった先輩や後輩との縦のつながり。それに加えて、学生と距離が近く、ちょっとしたことでも相談に乗ってくださる教員の先生方とのつながりや、学生ひとりひとりの顔を覚え時には声をかけてくださる事務員さんや図書館職員さんとのつながりも、他大学・他学部にはないところだと思います。そういったつながりの中で、人との関わることの暖かさを感じ、自分とは違う物の見方や考え方を知りたい機会にもなっています。

「人間について学びたい」と思って選んだ教育学部。授業を通しての学びはもちろん、授業外での人との関わりを通して学ばされることが多くあります。こんな恵まれた環境にいられる私は幸せです。この感謝の気持ちを忘れずに、残りの学生生活も毎日楽しみながら成長していきたいです。



グローバルCOEの21年度の活動

教育認知心理学講座 教授、拠点リーダー 子安増生



グローバルCOE「心が活きる教育のための国際的拠点」は、5年計画のプロジェクトの3年目に入りました。折り返し点が近づき、後半戦に向けての態勢の確認を求められる時期です。昨年末には、国内の著名な心理学者、教育学者各3人の先生に拠点の外部評価をお願いし、全体に高い評価結果をいただきました。また、4月には、中間評価報告書を提出しました。これから当該委員会のヒアリングを受け、秋には評価結果が出ます。

5月には、ナカニシヤ出版から『心が活きる教育に向かって—幸福感を紡ぐ心理学・教育学』を刊行します。本書は、一般向けの書物であり、全体が二部構成で、第一部の章立てと執筆者は以下の通りです(敬称略)。

- 序 章「心が活きる教育に向かって」(子安増生)
- 第1章「《NHK 青年の主張》における幸福感のゆくえ」(佐藤卓己)
- 第2章「能力と幸福、そして幸福感—強さと弱さ」(松下佳代)
- 第3章「家庭と学校における幸福感—日独比較調査に向けて」(鈴木晶子)
- 第4章「ブータンに学ぶ幸福感と教育—伝統と近代の衝突と

共生」(杉本均)

第5章「共有空間を創造する地域活性化—過疎リスクへの挑戦」(杉万俊夫)

第6章「南極に生きるこころ」(桑原知子ほか)

第7章「動物の幸福と人の幸福」(藤田和生)

本書の第二部は、「心が生きる教育」に関わるショート・エッセイ集であり、執筆陣は、登場順に松沢哲郎、板倉昭二、齋木潤、岡田敬司、辻本雅史、西平直、田中耕治、稲垣恭子、河合俊雄、矢野智司、山田洋子、カール・ベッカーの各先生と子安です。

最後に、今年度も人材育成に関する3事業を実施します。「海外留学資金」4人、「研究開発コロキウム」22人、「院生養成プログラム研究費」10件を採択しました。また、20年度から開始した大学院修士課程1年生を主要な対象とする研究室相互訪問事業の「EXラボ」も9月に実施します。院生の皆さんがこのような機会を上手に活用して下さることを願っています。



大学院教育改革支援プログラム(大学院GP)から

心理臨床学講座 教授 桑原知子



大学院教育改革支援プログラム(大学院GP「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成—京大型臨床の知プログラム」)も、2年目を終了しました。昨年度は、新科目「京大型臨床論」の開講、国内外からの優れた専門家、実践家を招聘しての、シンポジウムや講演会など、数多くの企画が実行されました。「臨床の知」は、本を読むという方法だけでは得られ難く、直接人間に触れることから学ぶ側面があります。平成20年度に実施されたこうした企画は、意識的、無意識的通路を経て、大学院生のこころに届いたものと思われまふ。なお、こうした講演会のうちのいくつかは、前年度の国際交流の成果として企画されたものでした。渡航した大学院生だけではなく、より多くの大学院生が貴重な出会いを体験することができたことも、各企画の有機的な連動の成果を示していると言えます。

また、大学院生が主体的に創造的研究を遂行すること、その成果を広く発信する能力を高めることをめざし、大学院研究開発コロキウムを支援し、また、国内外で大学院生が学会発表を行う際の、学会発表支援や、外国語論文作成支援なども積極的に

おこなってきました。こうした支援は、着実に大学院生のなかに浸透し、その学問的活動や内的蓄積は、前年までに比べて格段に増加したと考えられます。

しかし、量的な側面の増加が必ずしも質的な側面の向上を保証するわけではありません。「臨床の知」ということを考えるとき、その「評価」は、数量的に実証しうる量的なものに限らないのです。量的には抽出し難くても、質的に、あるいは、実践の上で、いわゆる「身につく」という蓄積の形態があるように思います。

来年度は、こうした質的な向上をめざしつつ、一方で、引き続き「臨床の知」をめぐる多角的な取り組みを継続していきたいと考えています。また、「科学の知」との対話の機会も増やしていきたいという希望を持っています。そして、最終年度として、これまでの成果を机上のものに終わらせず、今後に生かしていけるよう、総力を結集したいと考えております。



教育実践コラボレーション・センターから

コラボレーション・センター関連 助教 吉田 正 純



この4月から教育実践コラボレーション・センターの助教となりました。本センターは京都大学教育学研究科の「子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業」のもと、2007年4月に設立され、今年で3年目を迎えます。センターの目的は現場から投げかけられた具体的な問題に対し、様々な研究分野の領域の枠を超えて、教育学研究科としての組織的な対応をコーディネートすることにあります。「コラボレーション」には今日社会が直面する様々な教育課題に挑戦するため、教育現場と大学の「協力・協同」を進めたいという意図が込められています。

本センターは「学校教育改善ユニット」「新しい教育関係ユニット」「教育空間創造ユニット」の三つのユニットを活動の柱として、今年度も教育現場とのコラボレーションを深めていきたいと考えております。「学校教育改善ユニット」では、京都市立高倉小学校や寝屋川市立田井小学校などに、大学院生が定期的に訪問して授業観察を行いながら、「子どもが育つ・教師が育つ」目標に向けて、現場との共同研究を進めています。「新しい教育関係ユニット」では、京都市立洛風中学校をはじめ全国の新しい教育関係実践を試みている学校との関わりを進め、「心理臨床領域」を中心に幅広い視点で教員・大学院生が参加・助言を行いつつ、「学校とは・教育とは何か」という問いに取り組んでいます。「教育空間創造ユニット」では、南山城村野殿倉仙房地域と「生涯学習推進委員会」を立ち上げて連携を進め、地域の人々と教員・大学院生が「風と雲の広場」「農業体験」等によって生涯学習の空間を育てながら、フィールドワークを通じて現地との共同での学

びをつくることを目指しています。また本年度も「研究開発コロキアム」が開設され、本センターではユニットの活動とも連携した院生を主体の三つのプロジェクトに対し助成を行っています。

国際関係ではセンター企画として、7月31日に、「日韓の教育改革の行方」と題して、白淳根氏・磯田文雄氏らをお迎えしてシンポジウムを開催します。昨年の日中韓シンポジウムに引き続いて、現在の日韓両国の教育改革の最前線にある方々のご意見を交えて、今後の教育評価・教育課程のあり方を探っていきたいと思います。

本年度はセンターも三年目を迎え、活動を振り返り中間報告を行う年度にあたります。これまで二年間で各ユニットは現場との連携を深め、大学院生も含めた幅広い交流と豊富な経験の蓄積がなされてきました。今後はこれらをもとに大学側の知見と協働によって、より高度で専門的な関わりを教育現場へと還元していくために、さらなる努力をしまいたいと思います。教育学研究科という「実践」と強い関わりをもつ研究分野としての社会的役割を果たすべく、研究者・大学院生が力を発揮できるような環境をつくっていききたいと思います。三年目の新たなセンターの飛躍のために、フィールドと人々の架け橋として、全力で取り組んでいきますので、皆様のご指導・ご協力よろしく申し上げます。



臨床教育実践研究センターから

臨床心理実践学講座 助教 井上 嘉 孝



臨床教育実践研究センターは平成9年に設立され、今年で13年目になります。10年間活動していた文学部東館を離れ、今年から百万遍近くの総合研究1号館に移転しました。

センターの基盤は心理教育相談室における心理臨床実践です。この相談室は今年で30年目、当時の文部省から認可された国立大学における日本初の有料心理相談施設で、2008年の総面接数は4700件を超えています。われわれはこの一人ひとりに対する心理臨床実践を何よりも大切にしながら、より普遍的なところの問題を様々な形で考えてきました。

センター設立以来、リカレント教育講座と公開講座という二つの事業を継続的に開催しています。前者は学校現場に関わる教師や専門家に向けたもので、昨年度は「『心の教育』を考える一個のあり方を大事にする関わりー」というテーマで実施いたしま

した。後者は外国人客員教授を講師として一般の方向けに開催しています。どちらも心理臨床の観点から現代のこのころの問題を考える貴重な場となっています。毎年刊行される臨床教育実践研究センター紀要には、これらの講座の抄録などが収録され、豊かな個性と自由な気風のもとに研究と臨床が積み重ねられています。

このように個別の深みをしっかりと抱えながら多様な広がりをもつ営みが心理臨床なのではないかと考えています。今後とも、臨床教育実践研究センター、および心理教育相談室の活動にご支援賜りますよう、心よりお願い申し上げます。



事務室から

事務長 吉井 晃



4月に着任以来、間も無く3ヶ月が過ぎようとしているが、誌面をお借りしてこの間に感じたことを思いつくまま書いてみたい。実に充実した日々を送ることができた。

まず、5月には当番校として国立大学法人9大学教育学部長会議を開催し、活発に意見が交わされ有意義な会議となった。6月には教育学部創立六十周年記念行事を開催し、多くの方々に出席いただき、正に「還暦」の節目を盛大に祝うことができた。

そして、現在着々と進んでいる教育学部本館の耐震改修工事である。漸く移転先も決まり、これから改修後の再配置について建築委員会、予算委員会で議論を重ね7月の研究科教授会で決定されることとなる。これまでの経緯にとらわれず、また講座の利害を超え、教育学部・教育学研究科の将来の発展・充実を見据えた新生教育学部・教育学研究科の建物としてリニューアルされることを切に望んでいます。

また、これまで次から次へと無理難題とも思われる要望等にも快く対応していただいた施設環境部の担当の方々に御礼を申し上げたい。

次に事務体制ですが、現在、グローバルCOE・特別教育研究経費・大学院GPの3つの教育・研究プロジェクトが進行中であり、会計掛に「プロジェクト推進室」を立ち上げて、プロジェクトを専門に対応する体制を整えたところであるが、更にプロジェクト業務が円滑に遂行できるよう、一層の機能強化・充実に向け改修後の配置場所も含め同室の在り方を見直したい。

最後に、事務局として常に共感的意識を持ち、前例にとらわれることなく新たな視点で研究科、大学の諸課題の実現に努めていきたい。



図書室から

専門職員(図書掛長) 沼澤 博



1年前に発行された『News Letter』No.16の「図書室から」において、そのうちに耐震工事が行われる旨をお伝えしました。そして同No.17の「事務室から」において、いつ耐震工事の予算措置がとられても即対応できるように、早い時期に基本方針を策定しておく必要がある、との指摘がなされましたが、その時点ではまだ具体化しているわけではありませんでした。

しかし、『News Letter』が発行された直後に、年末に提出される予定の補正予算に教育学部棟の耐震工事が組み込まれているとの情報が入り、急転直下、工事が具体化することになりました。あまりの急な変化に教育学部全体がドタバタしています。

教育学部の図書の利用はどうなるの？ 利用者みなさん、特に修論や卒論を控えている人びとにとっての最大の関心事とは、そのことでしょうか。早く情報が欲しいという声を聞きますし、例えば、貸出冊数の制限を緩和して欲しい、という具体的な要望の声も聞こえています。修論・卒論を控えている人びとにとっては、一番大切なときに図書が使えなくなるわけですから、当然のことです。しかし、不確定な事項が多いため、軽々に情報公開できないというのが現状なのです。

とりあえず近衛にある職員会館の1階を借りて、そこに3万5千冊から3万8千冊ほどを移動させ、利用に供す予定です(これ以外の図書は梱包しますので、一切利用できなくなります)。現在その選書を依頼しているところで、6月早々にリストの提出を受け、重複等のチェックをしたあとで、講座間のバランス等を勘

案して調整を行い、最終的に職員会館に移動させる図書を決定します。これが6月の下旬あたりになるでしょうか。

職員会館で保管する図書は事前に申込を受け、それを職員が出納してきて貸し出すことになると思われますが、具体的な内容はまだ決まっていません。利用が多ければ日に2、3回は取りに行かねばならないでしょうが、それだけの時間がとれるのかどうか、まだ全然わかりません。実際に運用していくなかで、少しずつよりよい方法を見出していくことになるでしょう。

タイムスケジュールも決まっていませんが、6月一杯はこれまでどおりでしょう。7月になると移転作業やその準備の必要があるため、ほとんど使えなくなるのではないかと考えられます。職員会館に移動させた図書の利用再開は8月になってからで、一日も早くとは考えていますが、具体的な日程は未定です。ただ、6月中旬以降に貸し出した図書の返却期限は8月の開室以後(現在のところ9月2日を考えています)になりますから、必要な、あるいは必要になりそうな図書は、その時にできるだけたくさん借り出しておいてもらえばいい、と考えています。それらの図書は移転中も利用可能図書となりますから。

例年は夏季休暇に入る8月の利用は相対的に少ないので、閉室してもそれほど支障はないかな、と都合のいい想像したりするのですが、はたしていかがなものでしょうか。



留学生から

比較教育政策学講座 博士後期過程1年 黄 儒 芬



今年4月から無事に博士課程に進学できました。3年前日本に
来たばかりの私は、新しい環境にも進路にも戸惑っていました。
卒業論文のテーマの引き続き、教育分野で台湾の不登校につい
て研究し続けたいと考え比較教育政策学講座に受け入れてい
ただきました。研究方向から日常生活まで、先生と先輩方々から
細かいご指導やお世話を受けています。

普段のゼミでは各国の教育事情についてディスカッションし
て面白い情報と知識を得ています。授業後も院生室でみなさん
の感想や意見交換でたくさん勉強になっています。

入試論文や修士論文を作成
する期間中、先生と先輩たち
の温かく接してくださる好意
にしみじみと感じています。修
士論文を提出してからお疲れ様会としてお鍋パーティーを行っ
てくださって、先生方々もご一緒でしたので、非常に家庭的で温
かい気分でした。このような出会いに感謝しています。私は、いっ
ぱい恵まれてとても幸せです。ありがとうございます。これから
も徐々に研究を進めていこうと思います。

諸 記 録

◆平成21年度入試結果

・教育学部

日 程 等	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	
前期日程	文系	50	189	186	52	61
	理系	10	36	34	10	
第3年次編入学	10	23	22	6	6	

・教育学研究科

課 程 等	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	
修 士 課 程	研究者養成コース 教育科学専攻	18	47(5)	45(5)	22(4)	21(4)
	臨床教育学専攻	14	57(2)	53(2)	13(1)	12(1)
博士後期課程編入学	教育科学専攻(専修コース)	10	31	30	9	8
	臨床教育学専攻(第2種)	若干名	2	2	0	0
博士後期課程編入学	若干名	9(2)	9(2)	8(2)	7(2)	
臨床実践指導者養成コース	4	9	8	2	2	

()内の数は外国人留学生で内数

◆平成20年度学位授与件数

(H21.3.31現在)

学 位 名 等	授与者数
学 士	教育科学科 68
修 士	教育科学専攻 30
	臨床教育学専攻 12
博 士	課程博士 11
	論文博士 2

◆教育職員免許状取得状況

平成20年度(2008)

中学校専修免許状	0
中学校1種免許状	2
高等学校専修免許状	0
高等学校1種免許状	3
養護学校1種免許状	0
養護学校2種免許状	0

◆ 人事異動 (H20.11.2～H20.6.1)

平成21年1月1日付け

小野 文生 助教 (グローバルCOE関連) 採用

高橋 靖恵 准教授 (九州大学大学院人間環境学研究科から)
(臨床実践指導学講座) 採用

野口 剛 助教 (教育社会学講座) 採用

井上 嘉孝 助教 (臨床心理実践学講座) 採用

吉田 正純 助教 (教育実践コラボレーションセンター関連) 採用

平成21年3月31日付け

伊藤 良子 教授 (臨床心理実践学講座) 定年退職

浅田 剛正 助教 (臨床実践指導学講座) 辞職

片畑真由美 助教 (臨床心理実践学講座) 辞職

安川由貴子 助教 (コラボレーションセンター関連) 任期満了退職



平成21年4月1日付け

子安 増生 教授 教育研究評議会・評議員
(任期 21.4.1～23.3.31)

辻本 雅史 教授 教育研究評議会・評議員
(任期 21.4.1～23.3.31)

西平 直 教授 現代教育基礎学系長
(任期 21.4.1～22.3.31)

桑原 知子 教授 教育心理学系長
(任期 21.4.1～22.3.31)

川崎 良孝 教授 関連教育システム論系長
(任期 21.4.1～22.3.31)

角野 善宏 教授 附属臨床教育実践研究センター長
(任期 21.4.1～23.3.31)

平成21年5月1日付け



平成21年6月1日付け

松木 邦裕 教授 (臨床心理実践学講座) 採用

◆ 寄附金受入

寄附金の名称	寄附目的	寄附者	研究担当者
ジェネリックスキル測定の研究	子安増生教授の研究助成のため	株式会社ベネッセコーポレーション ベネッセ教育研究開発センター	子安 増生 教授
批判的思考の認知的研究	楠見孝教授の研究助成のため	株式会社ベネッセコーポレーション ベネッセ教育研究開発センター	楠見 孝 教授
高見茂教授 (教育学研究科) の研究活動に対する助成	高見茂教授 (教育学研究科) の研究活動に対する助成	株式会社キョウト・ユニバー	高見 茂 教授

◆ 受託研究受入

委託者	研究題目	研究担当者
独立行政法人雇用・能力開発機構京都センター	「就業意欲」の有無を判別する仕組みの開発	高見 茂 教授

◆ 科学研究費補助金

21年度

研究種目	研究題目	研究担当者
基盤研究(A)海外	多文化横断ナラティブ・フィールドワークによる臨床支援と対話教育法の開発	山田 洋子
基盤研究(B)一般	「心の理論」の獲得と実行機能の発達	子安 増生
基盤研究(B)一般	批判的思考の認知的基礎と教育実践	楠見 孝
基盤研究(B)一般	近代日本の植民地経験とアイデンティティ形成に関する比較教育文化史的研究	駒込 武
基盤研究(B)一般	教育委員会制度を支える公会計制度の開発とその適用可能性の検証	高見 茂
基盤研究(B)一般	「わざ」の継承に働く「知」の構造を解明する—新たな学習術理の創成に向けて	鈴木 晶子
基盤研究(B)一般	トランスナショナル・エデュケーションに関する総合的国際研究	杉本 均
基盤研究(B)一般	ソフト・パワー構築に向けたメディア文化政策の国際比較研究	佐藤 卓己
基盤研究(B)一般	E. FORUMカリキュラム設計データベースを活用したスタンダードの開発	矢野 智司
基盤研究(B)一般	「伝承・習い事」文化における継承と生涯学習の現代的課題に関する日中韓比較研究	渡邊 洋子
基盤研究(C)一般	シュタイナー教育とその周辺領域への参与観察による人智学共同体の教育人間学的解明	西平 直
基盤研究(C)一般	アクション・コントロールにおける言語性作動記憶の役割	齊藤 智
基盤研究(C)一般	リテラシーの育成をめざす評価規準と評価方法の開発	田中 耕治
基盤研究(C)一般	東アジア諸国・地域における大学入学者選抜制度の比較研究	南部 広孝
基盤研究(C)一般	心理臨床場面における対話の構造	桑原 知子
基盤研究(C)一般	スタンリー・カベルと「大人の教育としての哲学」—人文科学の学際・国際的交流研究—	齋藤 直子
基盤研究(C)一般	批判的図書館史研究の構築	川崎 良孝
基盤研究(C)一般	1990年代以降の学歴と初期キャリアの動態に関する比較研究	岩井 八郎
挑戦的萌芽研究	医学教育従事者の専門職研修に関する成人教育学実践研究—教育学専攻者を中心に—	渡邊 洋子
挑戦的萌芽研究	「心の理論」の獲得とプラグマティックな言語理解の発達	子安 増生
挑戦的萌芽研究	女性の教養と理想的女性像に関する比較社会史的研究	稲垣 恭子
若手研究(A)	ヒトを含む霊長類乳児の感覚統合—分化と運動変換に関する比較研究	明和 政子
若手研究(A)	不妊治療経験者の選択と岐路、その支援：多様な親子関係を築く女性と子どもの語りから	安田 裕子
若手研究(B)	知覚世界を安定化するメカニズムに関する心理物理学的・認知脳科学的検討	廣瀬 信之
若手研究(B)	認識論的メタ認知と批判的思考の関連性に関する文化比較研究	C.F. Moises Kirk
若手研究(B)	科学者の探求手法を体験することで科学的思考を学ぶカリキュラムの検討	中池 竜一
若手研究(B)	パフォーマンス課題の効果的活用に関する国際比較調査	西岡加名恵
若手研究(B)	小学校英語における文字指導に関するカリキュラムの開発と評価	赤沢 真世
若手研究(スタートアップ)	高次認知の個人差とワーキングメモリ	大塚 結喜
若手研究(スタートアップ)	存在論に立脚した教育学の可能性と限界——ボルノウ教育学の再考を軸に——	井谷 信彦
若手研究(スタートアップ)	子どもの言語経験にもとづいた小学校英語教育カリキュラムの開発	赤沢 真世

◆ ハラスメント防止に関する研修会

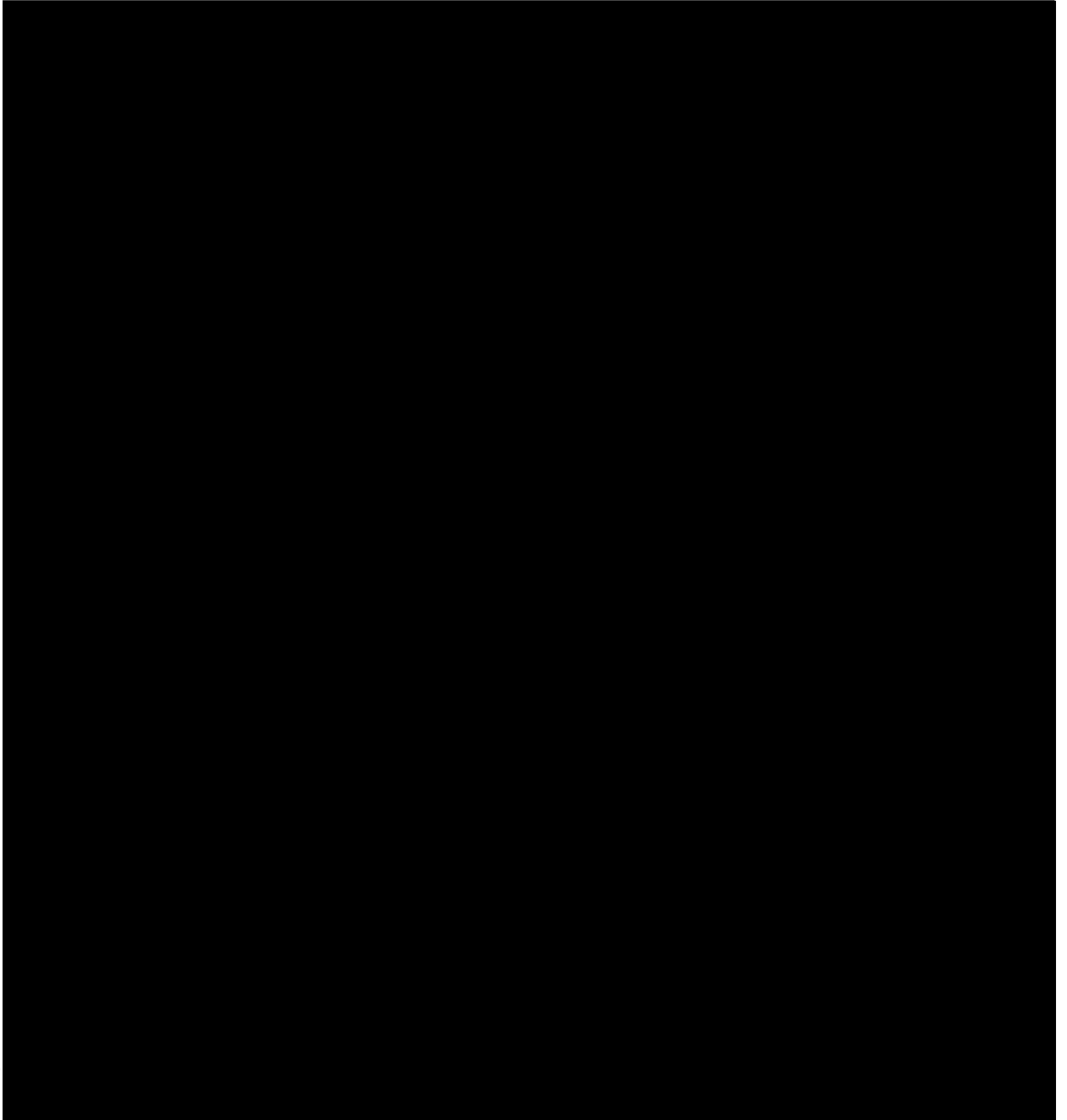


本研究科・学部では、教職員及び学生等の人権、特にハラスメントの認識をより深め、「ひと」としての人格や尊厳を高め、ハラスメントの防止を図ること、さらに就労上又は修学上の適正な環境を築くため、毎年、研修会を開催しています。

平成20年度は、平成21年2月5日(木)に開催し、近畿大学文芸学部 教授 大越愛子氏による「大学内でのハラスメント問題」と題する講演が第二講義室であり、教員、事務職員、学生の約30名程度の参加を得て、意識を高める機会となりました。

諸 報

◆ 新任教員・事務員紹介（「 」内は本人の抱負）



～ 編集後記 ～

「ニュースレター18号」をお届けいたします。2009年という年は、教育学研究科の歴史の中でも、最も多忙を極めた年として、後世に記憶されるのではないのでしょうか。「耐震工事」などという簡単な言葉では語り尽せない「大変化・大混乱」がやってきました。研究科のすべての部屋が、半年間、仮移転します。これを書いているひとつ隣の教授室は今日が引越当日。膨大な書籍を段ボールに詰めて運び出しています。この「ニュースレター」が皆さまのお手元に届く頃には、大工事が始まっていると思います。次のニュースレター（秋号）は、どこで、どうやって編集することになるのか。仮移転の半年間、様々なご不便、ご迷惑をおかけすることになると思いますが、装い新たな教育学部棟を夢見て、どうぞご理解のほど、よろしくお願いいたします。（TN）



京都大学教育学研究科 ・教育学部広報委員会

- 委員長 杉本 均 教授(比較教育政策講座)
委員 矢野 智司 教授(教育学研究科長・教育学部長)
委員 西平 直 教授(臨床教育学講座)
委員 高橋 靖恵 教授(臨床実践指導学講座)
委員 吉井 晃 事務長
委員 河合 明美 専門職員(総務掛長)
委員 西本 幸江 専門職員(教務掛長)

事務担当

教育学研究科・教育学部総務掛
TEL 075 (753) 3003